

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2025年1月20日

年末年始に読んだ本

穏やかに澄みわたる冬空とともに 2025 年がやってきました。遅ればせながら、皆さま明けましておめでとうございます。

さて、君はこの年末年始をどのように過ごしたのでしょうか。自分は比較的ゆったりと年越しをさせてもらいました。その間何冊か本を読んだのですが、なかなか面白い本に出会うことができました。今年最初の校長室だよりはその話を書きたいと思います。

『ゴッホは星空に何を見たか』 谷口義明著(光文社新書)

本校では、校舎の壁のあちこちに生徒諸君が美術の時間に描いた絵が飾られています。筆者は絵を見るのは好きなのですが、描く方はあまり(まったく)自信がありません。壁に掛かっている生徒たちの作品を見ると、「ああ、こんな風に自在に絵が描けたらどんなにか楽しいだろうなあ」とうらやましくなります。風景画や自画像も上手だなと思いますが、いつも感心して見るのは名画を模した油絵です。モネ、セザンヌ、フェルメール、ドガなどの有名な作品の本物さながらの模写が飾られており、通りかかるといつも、思わず足を止めて見入ってしまいます。

画家の中で誰が好きかと聞かれたら、自分は迷わずヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(注1)と答えます。高校生の時、小遣いをためてゴッホの画集を買いました。今でも家のどこかにあるはずです。以前ある同僚にこの話をしたら、「えっ先生が? いやあ、ぜんっぜんイメージじゃないですね～」と爆笑されました。こういうのって何かのハラスメントで訴えられないのだろうか?

とまあ、そんなことはどうでもいいとして、『ゴッホは星空に…』の著者谷口さんの本職は天文学者です。宮沢賢治(注2)の作品に出てくる宇宙の話について調べるうち、賢治がゴッホの《星月夜》に触発されて『銀河鉄道の夜』を構想したと知り、ゴッホに興味を持つようになった、と書いてあります。実際にゴッホは星空を描いた作品を数多く残しています。『ゴッホは星空に…』では、その中から《夜のカフェテラス》、《ローヌ川の星月夜》、《星月夜》、《糸杉と星の見える道》、《ウジェーヌ・ボックの肖像》の5作品を取り上げ、そこに描かれている星空はどの星座のどの星であるのか、描かれた季節はいつで、時刻は何時頃なのか、など天文学者ならではの視点からゴッホの絵を解析しています。意外だったのは、ゴッホが、実際の星空を忠実に描いていた可能性が高いということでした。例えば《ローヌ川の星月夜》に描かれている星の配置は、いくつかの星座の形によく似ており、絵の描かれた方角や季節から、ゴッホが見た星空を特定する試みが為されていました。

自分が一番おもしろく読んだのは、《星月夜》について書かれた章でした。数あるゴッホの作品

の中でも、《星月夜》は見る人に強力なインパクトを与える作品の一つでしょう。カンバスにはゴッホ特有の力強い筆遣いで、糸杉の黒くよじれた影と、星々の青白い光を浴びて寝静まる山麓さんろくの村が描かれています。そして何よりこの絵で特徴的なのは、夜空の描写です。渦巻く台風の雲のような、急流に生ずる水の渦のような、エネルギーに満ちてねじれ逆巻く夜空には、巨大な星々が煌々こうこうと輝き地上を照らしているのです。その壮大な光景は、まるで人知のおよばない宇宙の摂理せつりを啓示しているかのようにも思えます。



ゴッホ《星月夜》

谷口さんは、《星月夜》の画面右上に描かれている月の形について考察しています。《星月夜》は、フランス南部の町、サン=レミの療養所で1889年6月の18日以前に描かれました。根拠はゴッホが弟テオにあてた6月18日付の手紙に「星空の習作を書き上げた」と書いていることです。糸杉の右側に描かれているひときわ明るく輝く星は金星だと考えられています。金星は明けの明星で、ゴッホは夜明け前の刻限に東の空を向いて絵を描いたことになります。ところが調べてみると、1889年6月18日の月齢は十九、半月よりもやや膨らんだ月の形が見えていたはずだということです。18日より前であれば、もっと満月に近い形になります。ゴッホが描いたような形の月を見るためには、18日よりさらに一週間程度後の時期を待たなければなりません。谷口さんは「ゴッホはなぜ月の形を見たままの形にしなかったのか」と疑問を呈しています。

また『ゴッホは星空に…』の中で、谷口さんは、《星月夜》の渦巻く夜空について大胆な仮説を述べています。《星月夜》に描かれた渦巻きは「渦巻き銀河M51」ではないか、ということです。M51銀河は地球からおよそ3700万光年離れた宇宙に存在し、別名「子持ち銀河」とも呼ばれます。その由来は、下の写真を見てもらえば分かりますとおり、M51銀河の右隣に、NGC5195銀河を伴っている点にあります。私たちが現在見ることができるのは、2つの銀河が2億年以上前に衝突し、すり抜けて離ればなれになっていく途中経過の姿だといいます。谷口さんが注目したのは、《星月夜》の画面ほぼ中央に位置する大きな渦巻きと、その右側のやや小ぶりの渦巻きです。ゴッホは、《星月夜》の夜空に、M51星座とNGC5195銀河を描いたのではないか、というのが天文学者である谷口さんの見方です。



渦巻き銀河M51と
NGC5195銀河

上記の仮説が成立するためには、《星月夜》が描かれた1889年当時、M51銀河の存在や形状についてゴッホは知り得たか、という疑問に答える必要があります。『ゴッホは星空に…』によれば、渦巻銀河が認識されるようになったのは、天文学者エドウィン・ハッブルが「アンドロメダ星雲が天の川とは独立した銀河である」ことを発見した1925年のことだといえます。ゴッホが生きていた時代、M51銀河の存在は知られていませんでした。それではゴッホはどうやって《星月夜》にM51銀河を描くことができたのでしょうか？

谷口さんはこの問題について、アイルランドの天文学者ロス卿に注目しています。1840年代、ロス卿は、当時世界最大の口径183センチメートルの反射望遠鏡を製作してM51銀河（当時は銀河という認識はなかったが）を観察し、その雲のように渦巻く星々のスケッチを残しました。「渦巻星雲」という言葉を最初に使ったのはロス卿だったといえます。このスケッチは、天文学の解説書で紹介され大いに話題となりました。ゴッホは何かの機会にこのスケッチを見て自分の絵に取り入れたのではないか、というのが谷口さんの推理です。

自分がゴッホの《星月夜》に出会って半世紀近くが経ちますが、あの星空の渦巻を銀河と結びつけて考えたことはありませんでした。もしも描かれているのが本当に渦巻星雲だとしたら、《星月夜》が表現する世界観の受け止め方が大きく変わる気がします。また、糸杉の右側に輝く星を金星とする説も初めて知りました。太陽系の第2惑星で、地球によく似ているとされる金星ですが、二酸化炭素からなる厚い大気により強い温室効果がはたらき、表面の温度は摂氏400度を超えると言われています。さらに、その大気の上空には硫酸の雲が星全体を覆っています。金星が明けの明星、宵の明星と呼ばれ明るい光を放つのは、この硫酸の雲が太陽光を反射するからです。《星月夜》に描かれた金星は、太陽のように明るく輝いています。ゴッホの目には灼熱の炎に彩られた金星の大地が見えていたのかもしれません。

高3の冬、夜遅くまで受験勉強をしていて、疲れると時々外に出て星空を眺めました。周辺に明かりのない山村の夜空には、満天の星々が燦然と輝き、驚くほど星が流れました。ああ宇宙は生きているのだなあ、というようなことを漠然と感じた覚えがあります。

太古の昔から人々は星空を眺めてきました。星空には、人を惹きつけて止まない魅力がある

ようです。メソポタミアの羊飼いたちは星の並びを結びつけて様々な星座を生み出し、古代中国の人々は天の河を渡って年に一度だけ会うことを許された恋人たちの物語を想像し、ガリレオ・ガリレイは天動説を覆して地動説を唱え、宮沢賢治は不思議な列車で銀河を旅する二人の少年の物語を書きました。そして現代の科学は、太陽系の果ての小惑星まで探査機を飛ばして宇宙の神秘を解き明かそうとしています。ゴッホの眺めた星空は、今夜も私たちの頭上はるかに広がり、当時と変わらぬ静謐な光を放っています。

注1) ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ

1853年～1890年。ポスト印象派を代表するオランダの画家。オランダ語の発音に基づき、フィンセント・ファン・ゴッホとも表記される。作品は、率直な感情表現、大胆な色使いを特徴としている。本文で紹介した以外にも、「ひまわり」、「自画像」、「カラスのいる麦畑」など有名な作品多数。生前には高い評価を受けることはなかった。精神病を患い療養の傍ら制作を続けたが、1890年、ピストル自殺を図り、弟テオに看取られて死去した。

注2) 宮沢賢治

1896年～1933年。詩人、童話作家。仏教信仰と農民生活に根ざした創作活動を行った。童話『注文の多い料理店』、『風の又三郎』、『銀河鉄道の夜』、詩集『春と修羅』などの作品で知られる。

『再考／ファスト風土化する日本／変貌する地方と郊外の未来』 三浦展著(光文社新書)

「ファスト〇〇」という言葉が一般化してどのくらい経つでしょうか？“fast”は本来「速い・迅速な」などを意味する英語ですが、ファスト・フード、ファスト・ファッションなど、現代の日本語では「手間がかからない」「低価格で手軽な」といったニュアンスで使用されることも多いようです。

『再考／ファスト風土化する…』の著者で社会デザイン研究者の三浦さんは、食べ物やファッションだけでなく、日本の風土、ひいては生活や文化までが「ファスト化」していると述べ、その現状に警鐘を鳴らし、脱・ファスト風土への道筋を示そうとしています。ちなみに本のタイトルに「再考」とあるのは、すでに三浦さんが2004年に『ファスト風土化する日本』という本を書いているからです。その20年後に改めてファスト風土について考えてみようとしたのが本書だと書かれています。(自分は『ファスト風土化する日本』については未読です。)

それにしても、そもそも「ファスト風土」とはいかなるものなのでしょうか？

典型的なファスト風土の例として、三浦さんは、日本中の地方のロードサイドに大型商業施設が出店し、その周辺にファストフードやコンビニエンスストア、大型量販店やファミリーレストランなどが立ち並び、本来固有の歴史と自然を持っていた地方の風土が、まるでファストフードのように全国一律の均質なものとなった情景をあげています。

そう言われて考えてみると、本校が所在する水戸市も、ファスト風土の例外ではありません。水戸市の中心街を東西に走る主要道路の国道50号は、市街地の渋滞緩和等のため昭和の終わり頃に南に大きく迂回したバイパスが敷設されました。また2002年には、水戸市内原地区に

もバイパス道路が開通しています。内原地区のバイパス道路沿いに北関東でも有数の大型ショッピングモールが開業したのは2005年のことです。現在でも休日などには、駐車場に入りきれない車が国道に列をなすほどの水戸の人気スポットです。その周辺や、河田町、笠原町へとつながる国道50号バイパス沿線には、ファストフード店、ファミリーレストランやラーメンなどの飲食店、大型電機店、大型衣料品店、ホームセンター、中古車販売店、大規模量販店などが連なっています。そのほとんどが、全国または広域展開のチェーンストアで、個人経営の商業施設は数えるほどです。

そして、こうした光景は水戸のみならず、全国の地方都市に共通して見られます。以前、知り合いのアメリカ人に「日本の町は、どこに行っても同じだからつまらない」と言われて、ちょっとムカついた覚えがありますが、確かに日本の町が全国各地で均質化していることは紛れもない事実と認めざるをえません。

日本各地がファスト風土化していった理由は何でしょうか？複数の原因があげられると思いますが、その根本には市場経済と消費社会の拡大があると考えられます。さらに、政府や自治体による経済優先の施策、市場原理にもとづく(つまり、お金儲け目的の)企業主導の都市開発がファスト風土化の推進力となっていました。水戸を例にとるなら、水戸駅周辺の古くからの市街地を整理、再開発して新しい町や施設を作るのは費用もかかり、制約も多くなります。土地取得が容易で、物流や集客(ただし自動車利用)にも便利な郊外に新しい商業施設を作った方が、開発費用ははるかに低く、かつ安定した営業利益も見込めるでしょう。

それではいったい、ファスト風土化の何が問題なのでしょう？『再考／ファスト風土化する…』の中で三浦さんは、ファスト風土化の弊害を8つの項目に分けて説明しています。少し長くなりますが、要約してみたいと思います。

①世界の均質化による地域固有の文化の喪失

本来風土というもの、その土地その土地の自然の制約の中で、産業、職業、生活、文化が生まれ、それが文化風土、精神風土を形成する。その中で地域や人間性の多様化も生まれてくる。各地を均質な消費文化に埋没させるファスト風土化は、地域の個性を失わせ固有の文化を消滅させる。

②環境・エネルギーへの負荷

ファスト文化の急激な進展の背景には、それを支える自動車社会の拡大がある。自動車で郊外の商業施設を利用するライフスタイルは、石油を大量に消費し二酸化炭素を大量に排出し、地球環境に負荷を与える。また、大型ショッピングモールの冷暖房費だけでも膨大な電力を消費することになる。

③繰り返される破壊による街の使い捨て

ファスト風土化は、自然を破壊し、歴史ある中心市街地とそこにあった共同体を破壊する。ファスト風土化によって出現した郊外も、さらに新しい郊外化が進むことにより旧郊外となって衰退していく。これは「街の使い捨て」というべき状況であり、ファスト風土化は、自然、農村、都市、旧郊外を四重に破壊し、かつその破壊を繰り返していく。

④流動化による匿名化と犯罪の増加

ファスト風土化をもたらす道路網の整備は、地域の境界を越えて人と物の移動を活発にし、そこを行き来する人に匿名性をもたらす。流動性と匿名性は犯罪の温床となる。本来、歓楽街などの悪所は都市の中の囲われた一定の場所にあったが、ファスト風土では悪所が郊外のロードサイドに分散し犯罪が起こりやすくなる。

⑤大量浪費空間の突如出現による現実感覚の変容

ファスト風土化の中では、急速にしかも大量に消費社会化が進む。例えば田んぼの真ん中に巨大ショッピングモールができ、その周辺に大規模量販店が出店すると、そこに住む人々に大きなショックをもたらす、人々の人間観や倫理観にまでも影響をおよぼす。郊外の商業集積地で万引きが多発しているのは、そこにある物が作った人の顔が見えない、誰が作ったか分からない物だからである。

⑥手軽な大量消費による意欲の低下

大量消費空間の出現は、地方の青少年にとって、わざわざ東京に行かなくても欲しいものが手に入る状況をもたらす。東京の魅力は物の豊かさだけでなく、いろいろな人と出会い、広い視野を持ったり、多様な可能性を感じ、自分もその可能性を試そうという気持ちになったりする点にある。地方にいながら何でも手に入る状況は、実は若者から可能性を奪っている。

⑦生活空間の閉鎖化による子どもの発達^{そがい}の阻害

マイホームから必要なときだけマイカーに乗って、ショッピングモールに行って帰ってくるという行動は、閉じた空間の中を行き来しているだけだ。ショッピングモールにおいて人間は、ただの消費する個人として存在し、マニュアル化された疑似コミュニケーションを交わしているに過ぎない。

⑧地域文化の空洞化によるアイデンティティ危機から生まれるナショナリズム

ファスト風土化した郊外には地域に共有される歴史や伝統が希薄化している。ファスト風土的郊外で生まれ育った子どもが青少年期をむかえアイデンティティを確立しようとするとき、地域社会に規定されたいとは思わず、また弱体化した地域社会も個人のアイデンティティを規定する力を持たない。そのとき若者は一気に国家にすがりアイデンティティを確立しようとする可能性がある。

項目が多岐にわたるうえに、かなり要約したのでちょっと分かりづらいところもあったかもしれませんが、どうでしょうか？自分としては、「ふむふむ」と納得できるものもあれば、「それはちょっとどうかなあ」と思えるものもありました。

①のファスト風土化が地域の個性や文化を失わせる、というのは、まさにその通りだと思います。皆が同じ量販店で購入した洋服を着て、同じ大型スーパーで買い物をし、同じようなファミリーレストランで食事する街では、文化や個性は生まれにくいだろうなあと感じます。お祭りなどの地域の行事も縮小、消滅していくのかもしれない。読んでいく中で、現在の自分の日常が、三浦さんのいうファスト風土の中にどっぷり浸かっていることに気づき、ちょっとびっくりしました。ファスト風土の中にいる自分をファストと気づけないのは、心理的なファスト風土化が進んでいる証拠なんだろうなあ、と自戒しました。

③のファスト風土化が街を使い捨てにしている、という点も非常に納得できます。現在の大工

町から水戸駅にかけての国道50号沿いは、かつて(今も?)水戸の中心街でした。少なくとも現在では想像できないほど賑わった地域でした。泉町に二つ、駅前にも二つないし三つのデパートがあり、それらを中心に婦人服店、紳士服店、様々な個人商店や個人経営の飲食店が軒を並べ、休日の歩道は多くの買い物客であふれていました。しかし、現在同じ街では、休日でもシャッターを閉めた商店が数多く見受けられます。郊外にできた大きなスーパーマーケットやショッピングモールに車で出かけて行き、買い物をするライフスタイルが旧中心街を衰退させたのです。現在、多くの人が集まる商業施設がある地域も、さらに外部に郊外化が進み、そこに新たな商業施設が誕生すれば、旧郊外となって衰退していく運命をたどることになるのでしょう。

一方で、三浦さんの主張する、④のファスト風土化が進むと犯罪が増加する、⑧ファスト風土化が若者のナショナリズムを助長する、などはちょっと飛躍があるのではないかな、とも感じました。⑥などは、地方の持つポテンシャルを過小評価しすぎだと思います。東京だけじゃなく地方にも、若者の可能性を花開かせる環境はあるのだぞ!と声を大にしたい気持ちがあります。

『再考／ファスト風土化する・・・』は、前述の『ファスト風土化する日本』に基づいて各分野の識者や専門家が、それぞれの立場からファスト風土化について述べていくというスタイルで編集されています。大学の社会学の先生、映画監督、写真家、建築家、経営コンサルタントなど様々な専門分野をバックボーンに持つ方々からの、独自の視点に立った分析や提言があり、表現は適当かどうか分かりませんが、ファスト風土化問題の幕の内弁当的な感覚で大変興味深く、おもしろく読むことができました。

新海誠監督(注3)の映画に登場する風景描写と郊外化するファスト風土との関係に注目した、畠山宗明さんの「風景のリミックス／新海誠とポスト郊外の想像力」や、都市性と田舎らしさを融合させ、ワインと食文化を中心に、個性豊かな地域の存続を実現したイタリアの例を紹介する、陣内秀信さんの「イタリアから学ぶ脱ファスト風土」などもたいへんおもしろかったのですが、一番共感を覚えながら読んだのは、小説家の山内マリコさんが書かれた「地元に残れなかった者の、地元愛」です。

1980年、富山市に生まれた山内さんは、繁華街に六階建てのビルディングを構えていたおもちゃ屋さん(愛児堂)が、1989年にその場所から撤退し、2000年代に入ると郊外にアメリカ生まれの(トイザらス)が登場したことを回顧しています。県外の大学に進学した頃には、富山市郊外に、ユニクロ、ニトリ、ヤマダ電機、ブックオフ、ダイソーなどが次々とできて、みるみる人が減った旧中心街はシャッター街となり、「取り返しがつかないほど寂れきって」しまったと感じます。

ロードサイドにド派手な巨大看板が連なり、大量消費的でプラスチックな生活で成り立っている「わが街」を、山内さんは「地元」と呼びます。「そこは“故郷”でも“ふるさと”でもない。それらの言葉が持つ、湿っぽい愛情や胸が痛むような郷愁は、どうもしっくりこない。たしかに愛はあるけれど、もう少し^{ふさわ}渴いていて、感情に絡め取られない呼び方が相応しい。そう、そこは“地元”だ」十八歳で街を出るときも、後ろ髪を引かれるものはなにもなかったといいます。

それから十年以上が経ち、富山はさらに郊外化した地方都市となっています。山内さんは、地元で育つ姪っ子たちが、おじいちゃん、おばあちゃんに(トイザらス)でおもちゃを買ってもらって喜んでいる姿を見て、ここがこの子たちにとっての、かけがえのない場所として記憶されて行くのかな、それはそれで素敵なことだ、と考えます。「街は、それ自体が主体性を持った生き物のように思える。人々の欲望を満たすべく日々進化していく。それでいて、木々の一本一本や縁石ひと

つに至るまで人間の仕業のはずなのに、コントロールは不可能なのだ。そして街は死なない。人だけが死に、また生まれてくる。どのタイミングでその街にライド・オンするかによって、懐かしい景色が変わるだけで」。

年末にテレビで、「ドキュメント72hours／国道4号線 ドライブインは眠らない」という番組を見ました。国道4号は、東京から青森まで東北地方を縦断する幹線道路です。その道沿いにある福島県の24時間営業ドライブインの72時間に密着したドキュメンタリー番組でした。古ぼけたドライブインは郊外のロードサイドに位置しており、まさに一昔前のファスト風土といった雰囲気です。この、もつ煮込みやチャーハン、カレーライスやスタミナ定食などをふるまう古いドライブインには、様々な物語を持った人々が訪れて来ます。地元の活性化について定期的に会合という名の飲み会を行っているという消防団のメンバー、社会人となって両親に食事をごちそうしに来た、今は都会に住む若者、トラック運転手だった父親との思い出があるという男性は、自身もトラック運転手となり、奥さんと子どもたちを連れてドライブインを訪れていました。

私たちが今、ファスト風土と考えている景色も、時が経ち、人の営みが積み重なって行く中で、その景色に新たな意味や思いが生まれてくるのかも知れません。幼い子どもたち、またこれから生まれてくる子どもたちにとって、懐かしい“ふるさと”となる日が来るのかもしれない。「街は死なない。人だけが死に、また生まれてくる。どのタイミングでその街にライド・オンするかによって、懐かしい景色が変わるだけで」という山内さんのことばが、すんなりと胸の内におさまる気がしました。

『再考／ファスト風土化する・・・』は、読み進める中で色々なことを考えさせられる、問題提起と気づきに満ちた、刺激的な一冊でした。

注3)新海誠

脚本家、アニメーター、アニメーション監督。代表作品に「君の名は。」「天気の子」「すずめの戸締まり」などがある。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。